令和７年度全国学力・学習状況調査における

北九州市立　　向洋　　中学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、３年生を対象として、令和７年４月１７日（木）に、「教科（国語、数学に関する調査）」、文部科学省が指定した日（４月１４日から４月１７日の間）に「教科（理科に関する調査）」、「生徒質問調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

１．調査の目的

⑴　義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

⑵　学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

⑶　そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

２．調査内容

⑴　教科に関する調査（国語、数学、理科）

教科に関する調査（国語、数学、理科）
①　身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等 ②　知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

※調査では、上記①と②を一体的に問うこととする。

⑵　生徒質問調査

生徒質問調査
○　学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

３．教科に関する調査結果の概要

⑴　全国・本市の学力調査（国語、数学、理科）の結果

本年度の結果	国語		数学		理科
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	IRTスコア
本市	7.4	53	6.7	45	492
全国	7.6	54	7.2	48	503

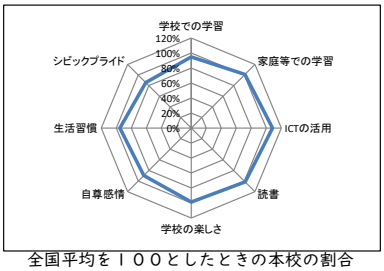
⑵　本校の学力調査結果の分析

国語	全体的な 傾向や特徴など	問題形式では短答式や記述式よりも選択式の方が正答率が高く、言語活動の領域では「読むこと」に関する問題の正答率が高い。全体として基礎的な知識の定着よりも文章を読み取り考えをまとめる力が比較的育っていることが分かる。一方で表現力や記述力をさらに伸ばすことが今後の課題であるといえる。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	目的に応じて、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすることができるかどうかをみる問題	
	努力が必要な問題	自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くことができるかどうかをみる問題	

数学	全体的な 傾向や特徴など	問題形式では短答式や記述式よりも選択式の方が正答率が高い傾向が見られる。また、領域別では「図形」に関する問題の正答率が高く、基礎的な技能や図形分野の理解は比較的定着していることが分かる。応用的な思考力や記述力を育成するとともに、数と式や関数の分野における理解を深めることが今後の課題であるといえる。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	必ず起こる事柄の確率について理解しているかどうかをみる問題	
	努力が必要な問題	事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することができるかどうかをみる問題	

理科	全体的な 傾向や特徴など	問題形式では、選択式の正答率が高い傾向が見られる。また、領域ごとの正答率には大きな差がなく、知識・技能を問う問題の方が比較的正答率が高い。基礎的な理解は一定程度定着しているが、応用力の育成に課題が残されており、基礎知識を活用しながら考察を深める学習活動を充実させ、全国水準に近づける取り組みが求められる。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	火災における適切な避難行動を問うことで、気体の性質に関する知識が概念として身に付いているかどうかをみる問題	
	努力が必要な問題	考察をより確かなものにするために、知識及び技能を活用して、実験を計画し、予想される実験の結果を適切に説明できるかどうかをみる問題	

４．学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問調査結果の概要



全国平均を１００としたときの本校の割合

質問調査の結果分析

・　家庭での学習やICTの活用、読書活動において全国平均を上回っており、家庭学習の習慣や情報活用能力が比較的定着していることが分かった。
・　学校での学習や学校生活の楽しさ、自尊感情、生活習慣、そして地域に対する誇り（シビックプライド）については全国平均を下回っており、特にシビックプライドの低さが顕著である。
・　学校生活の充実や自己肯定感の向上、地域とのつながりを意識した取組を強化することが、今後の課題解決に向けて重点的に取り組むべき方向性であるといえる。

５．調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

①　教科に関する取組

国語：読む力は育っているものの表現力や記述力の向上が課題であり、記述活動を充実させる取組が必要である。
数学：図形分野の理解は定着しているが、数と式や関数の理解や応用的な思考力の育成が課題であり、問題解決型学習の強化が求められる。
理科：知識・技能は定着しているものの応用力が不足しており、観察・実験を基に考察を深める学習活動を重点的に行うことが重要である。

②　家庭生活習慣等に関する取組

〇地域活動や読書活動を家庭と学校で共有し、地域の人々との交流や読書体験を教育活動に取り入れることが効果的である。
〇シビックプライドの向上や自己肯定感の育成を目指して学校生活を充実させることで、家庭・学校・地域が一体となった学習環境の整備と生徒の成長を支える取組を推進する必要がある。